

十一ノ一七、遊笠置山記（津坂東陽）

出典 津坂東陽詩文集（国会図書館所蔵・和本）

解説 藤堂藩の儒者、津坂東陽の笠置登山の記録。格調高い名文で笠置山を紹介する屈指のもの。

津坂東陽（孝緯）は友人の機宗禪師と相語らって登山。午後に上野を発ち、夕方に笠置に至る。翌早朝地元の案内人を先頭に登山を開始して名所を巡り、山上からの景色を楽しんだ。下山後、木津川に舟を浮かべ、獅子ガ淵（鹿ヶ淵）の上流まで遡って川岸の巨岩や急流の有様に喝采し、今を盛りのツツジを愛でた。午後四時頃舟を返し、降り出した雨の中を伊賀上野へと向かったが、途中豪雨となり、やっとの事で午後九時頃、伊賀上野の城門に入った。当時の人々は本当に健脚である。

笠置の景勝は大峰山には叶わないという者があるが、大峰は健脚でなければ入山できない。その点、笠置山は里に近く、登ることもたやすい。登ればわずかでその景勝は人の目を奪わせる。他にこのような山があるであろうかと絶賛する。

原文

笠置之山在畿内東偏、属我藩封域、距上野城半日程而近、其為神秀靈境、往昔巫和之大峰云、往昔金剛界、彼称余初來于上野、即切折履之情、然無好伴、未能乘輿、十有三年于此矣、蓋遊勝地必須雅侶、苟伴俗物不若無遊也、今茲享和辛酉之歲、方外良友機宗禪師、為余謀遊、余搏髀雀躍、遂拉二三子以從焉、時夏五幾望、小午發足、迨暮抵笠置邑、歇逆旅之舍、隔水對山、是其北面巖岫崢嶸、宛然漢画形勢、上方勝槩思過半矣、且日夙起、雇鄉丁為導、侯山霧方晴、渡津過市、繞山西趾而行、斜自坤隅而登、樹竹蒙籠、無所眺覽、地勢陂陀易登、蓋盤回而行也、有双巖對峙為関者、其下設一團飄、以休登陟者之勞、呼曰楠廠、不知何謂、自是漸轉而北、約行六百步、詣福寿院、首觀古鐘、制頗奇雅、所謂瓜形者、相伝称黃鐘調、余請鳴之、悠揚清婉可聽、誠非尋常音也、躡蹻閱銘、建久年製、去今僅六百余年、當時古律久亡、恐無能制黃鐘者、余不能曉鐘律、若或偶中、抑亦奇矣、書不知誰手、古韻可玩、託摹於主僧而去、過護法祠、西折而行、路右有一奇樹、大逾合抱、亦數百年物、皮理皴皺、若浪紋、未審何木、殊方不可知、以余所經、他处未有見之者、良可異也、左顧則鉅巖兀然橫乎絕崖之上、魁偉驚人、状如隆厦、長十丈、其三之一、突出于崖外、路經其下、過者危之、号曰菓師石、不審其義、旁一巖贅附、曰馬蹄石、鄉導言上有蹄跡、儼然若印、相伝天武帝為皇子時、嘗獵于此、馬蹶幾殆、忽有神人扶掖、竟免顛墜、因卸笠置之石上、以記其識、及踐祚遂創伽藍、是其所以号笠置也、寺創於白創於白鳳壬午、去今千二百二十年相去數十弓、蒼巖負山、壁立北向、高可八丈、広五丈余、称弥勒石、陷中鑄像、是為当山本尊、罹災石焦、狀不分明、但頭上嵌光円相僅存而已、荒庭曠濶、更無一物、隔庭別架崖構堂、猶神祠之拝亭、不足古之什一

云、文殊石在弥勒之右、高及其半、濶倍之、此亦旧有所鑄、為回祿漫剝也、余偶記唐詩曰、真相有無因色界、化城興滅在蓮基、題之其旁之石、右還降磴、過堂下而北、又三大石負山並立、高可四丈、広半之、其一北向、号胎藏巖、次東向号金剛巖、兩巖連接而曲、如立屏風、下方分開、嵌然成洞、・黒不測、俗呼龍窟、其說河漢、殊属伝会、次亦東面、雕鏤虚空藏、形勢爛漫、巖面都遍、雖未免俗、亦奇觀也、殊怪巖倚絶崖、前劣通徑、無由設架棚、不知其於何所實足、豈実有神人履虚而作之邪、詔為天仙靈作、不能詰其說也、既而思之、此自山頂縫而下、捐命施工也、好奇行怪、不尤甚乎、巖額有窟、称星墜痕、郷導喋々語怪、令人揜耳焉、更北數十步、抵洞門、古歌所咏笠置石屋崇巖層疊、枕崖而峙、高可三丈、頂一全石横亘、厚可二丈、徑五六丈、方平若削成、内濶称之、巍然若城闕、容数人並行、余觀石門多矣、未嘗見若是宏壯者也、俗称千手岩屋、下曰觀音谷、天平年間僧良弁者、承詔祈雨、奉千手觀音于此、以修法云 洞口北向、前臨大壑、林巖峽流之景、天然一幅画図、窈窕深邃、極有幽趣、殆苦目不周玩、情不給賞、衆皆盪胸称觀止矣、洞中左傍有一小竇裁容人、詰曲窈窕、動或進退維谷、称為胚暉鑽入、若能行出者、得冥間與亡母相見云、浮屠愚人、不亦甚乎、洞下右崕巖、顔有大書篆文之刻、称楠公花押、相伝元弘之乱、公蒙徵來于此也、自題名以見志、好事者為鐫焉、字径尺余、頗似公諱字、余欲摹榻、崖峭無縁措足可恨也、出洞而西、從觀音谷之上、縁崖以去、蹊頗峻險、偃僕而進、汗津津下矣、傍有太鼓石、以杖擊之、馮馮有声、盖内虚也、行数百步、抵不動巖、山岬突出、如人竦肩、鉅石疊起、頂聳魁巖、自他望之、屹似巨仏之立、故号焉、是為山之極北、世俗所謂奥院者也、東峰有懸泉、号千手瀧、隔觀音谷望之、匹練飄颻之光、隱見乎松翠之間、亦絕妙画景也、俯瞰脚下、絶壑千尋、逡巡側身而過、俗称東觀 二三子直欲稜頂、余戒而止之、左旋繞其背、赴平等巖、戰兢匍匐、醜態可笑、余趨超不敢前、然不可独止、勉彊相從、即岬之肩尖、三面壁立峻絶而上頭坦夷如砥、広袤数丈、可坐百許人、中央有一円石、大約十圍、宛如台盤托物、見者恐其滾転、号曰盪石、ユルヤシ 余嘆曰、岌岌乎危哉、善矣其取勢命名也、郷導曰否、此石也人撼之輒動、宛転不已、若有血氣者、而地震暴風未嘗顛隊焉、於是隻手試之信矣、余聞之、西土釋山絶頂、一丸石高数十丈、欵置平石、下臨不測、有可転之而不転之勢、泉州靈山大磐石上、有一卷石、其形類毬而下不属、勢重万鈞、然以一夫撼之、則兀兀然動揺、紹興大龜塚上、直豎一石、如插槌、一人撼之則動、其下可以線過、而数十人昇之則不能起、莆田九鯉湖雷轟濤有石人、以手指戳之則動、而極力挨之、則屹然不動、雁蕩南峰有両石相庄、大可屋二間、下為静石、上為動石、欲推動之、須一人臥静石上撐以双脚、石轟然作聲、移開尺許、如立而手推之、雖千百人不能動、人咸以為理之不可解者、或謂神戲為之、余嘗思之、此蓋石底有筍相接、深入而漸大、故動而不転、是石亦然耳、不足怪也、進臨崕端、俯瞻巖壑、危尤甚、不禁目眩股栗、非君子之所宜近也、俗称西觀 是処眼界豁如、流峙之趣、奇絶殊勝、然人憚其險、或不能到焉、同遊僉曰、苟至此山而不詣此境、則如未始遊焉、余曰、然哉、抑食肉不食馬肝、不害為知味、何必勸人冒險耶、矧以親之遺体、徒為遊觀、履此不測、其可不戒哉、既而笑曰、山水中見二学究身一説法、頗亦殺風景、

恐山靈冷笑耳、即扞衣而起、鄉導援而止之、指点曰、良方傍麓一弧村曰飛鳥路、元弘天子アスカヂ蒙塵于此也、彼民導賊、夜由觀音谷登、襲陷行宮、何其刁狡也、於是我邑絕隣交、至今無肯與婚、如買奴婢亦弗容焉、彼輩子孫世患癩風、因号癩鄉鄙之、非孽報而何、睥睨其地、扼腕以語、令人慨焉激昂、嗟呼人心之尚義也、逮今五百歲而下、尚猶惡遺臭、邑俗之厚、殊可嘉稱、往歲我公巡封之日、稱為義邑、事見公覽古詩序、蓋倣楚人稱武陵為義陵云可謂華衰之褒哉、彼兇民之家、

眞所謂天刑病、不亦可畏也耶、臨風感歎者久之、復路而還、比往頗易、迤邐而南、登覽行在故趾、在中峰最高頂、古木蕭森、莽叢荒穢、不勝懷古之感、盤桓詠詩、不能成章、穿林繞徑、往西極山觜、道是楠公館舍之所、按史公拜命獻策即辭還河內、急於修城也、豈其所一宿、遂欽慕云然耶、亦盛德遺愛之至也、有一磐石、方四丈許高半之、一方斜下、可以攀躋、往昔官軍所鳴海螺、亦錯稱楠公吹螺巖、二三子走而上之、乘勢直趨、殊不為意、既而幾不能下、面無人色、教導基^レ之、狹趾疾步、乃得不顛、若少駐足便滾云、此亦游者所當戒也、其地白砂清麗、可不席而坐、蓋為霸府相君近朝京師而過、例所修憩所云、山下閭廛直在履底、滄流貫其間、舟舩泛泛殆可喚也、正南四里、南都春日山鬱秀乎群山之表、蒼翠可掬矣、迤西河內生駒山亦指諸掌、是日蒙雲不見、浪華即在其西、平安当直北、並距比十二里、皆可一日而至也、轉而東行可百步、逸出於弥勒石之頂、是処亦善響、足頓之鑿鑿鳴、余笑曰、弥勒何罪乃止、頰而窺之、杳見堂背、凜焉膽寒、足心酸澁、惴惴乎、相引以去、於是山中諸勝搜覽略遍、遂南過正月堂遺趾、磴徑迤・、降至藥師巖之下、顧念洞門之勝、猶未慊焉、再往觀之、愈難為懷、徒倚久之、然後始去、護法祠左方有東峰之路、詢之鄉導、無有奇觀、故不往焉、由福寿院前南行、覽般若台古基、灌木猥與不得入焉、昔者茲山之盛、台殿相望、莊嚴輪奐、元弘兵燹、盡為灰燼、壞磴・礎、隨處存跡耳、正月堂先南都二月堂、所創並建于天行、此則荒廢數百年、按圖得認其故址矣、般若台建久中本、平勝室四年、彼迄今歸存、遺法永山中與祖解脫上人所築、台上設六角堂云、余皆併其名失之衆頗惆悵、余為之誦唐句曰、仙境是誰知処所、人間空自造樓台、只道鬼神能護物、不知龍象自成灰、機宗啞然曰、亦講道學來、遂過多聞院、啓龕謁毘沙門像、相伝為楠公所奉持、全無馮據、疑亦誣耳、主僧齡過古希、龐眉古貌、似有道骨者、因質問山中故実、出旧記見跡、京僧月潭所録甚詳、但不勝恠誕、亦浮屠常態爾、

文殊不動知足三院、蓋不足往觀云、於是始辞山而下、還抵双巖之下、鄉導謂曰、來時失報、元弘之役、參人足助次郎重範守阪門、射殪先登二騎、賊躍馬逼埤、又射却之、南都僧兵累以巨石滾下、人馬粉碎、賊軍敗走、自相蹂踐、積屍填满山谷、此間号地獄壑、応是當時綽名、然則史称血漲川者、昧乎地理之過也、亭午到津頭、早所命舟艤埃、逆旅主人具廚帳以從、溯洄入峽中、即向在洞門所下瞰者也、源出于伊賀、西經木、津、入淀河、古称泉河過獅子潭、北崖積石成峯、高可百仞、峻嶒竦勢、涵影潭底、石罅疎松、參差如插、尤有逸趣、舟子指示曰、巖尖突起臨水、

形勢若獅頭、所以為名也、南顧見鯁巖者、頽然乎山之半腹、又水澗有蟹岩者、亦皆以形似得名、徒足悦俗眼耳、自此以往、兩岸林巖愈奇、杜鵑花點綴巖際、紅紫如繡、舟中伝杯引滿、殺菽略具、賞詠声驩、興可言耶、沂可十町、至旄頭湍、水心有兩巨石、突兀而出、駭水衝激、跳過石頂、其迸散而下、《鬆紛乱、比兜鑿所着白毘毚然下垂者、奇觀称名、鼓掌

歎賞、岸頭層巖競峙、杜鵑花最盛、爛漫照波、殊為壯觀、夫遊笠置者、不可不至斯境也、又不可不以斯時也、於是洗杯更酌、乘興忘反、日已向晡矣、乃命廻舟而下、時輕陰掩曖、微雨廉纖、烟嶂雲巒、幻出一段奇觀、余扣舷詠曰、山色空濛雨亦奇、機宗擊節曰、維天之賜、不亦厚乎、既反逆旅、雲陰俄加、霏暴至、余搔首而嘆曰、天賜過厚、何以堪之、機宗正色曰、於山暨峽免於妨遊、詎非幸歟、天何負乎、衆皆命輜、以油幘冒之、余笑其孱、獨撐傘而步、其性不勝油氣也、隴阪升降衝泥涉潦、殆將顛踏者數矣、薄暮屆島原駅、峽流驟溢、渡舟頗危、僅而獲濟、因恐前程阻水、努力疾走、不敢少愒、雨益甚、路益艱、逮夜臨長田川、猶聞喚渡聲、我心則降矣、比入城門、正初更頭也、同行內二人及余僕稍後、渡絶宿民家、翌午始歸、渡猶危云、嗚呼癡雨惱人、良亦苦矣、然勝地賞會之樂、良朋雅詠之歡、孰謂所得不償所失乎、矧夫十數年之素願、乃今而獲遂焉、不可以不記也、或曰、笠置勝槩、奇則奇矣、然視大峰、直兒孫耳、余謂大峰者窮僻之境、雲巒千里、鳥道僅通、非極健脚不易到焉、即奇偉瑰怪、固為絕妙、然荒涼杳絕、使人慳悽而寂寥、凡名山異境、卒皆然矣、今夫是山根盤里巷之間、登僅幾許、乃即絶勝奪目、佗山安得有之乎、豈不信為奇妙哉、是乃所以尤為名山也、爰撰此記、為後來探勝之客、不厭辭之絮煩、委曲具錄、緘悉罔遺、山之勝槩盡乎茲矣、庶使來遊者信足而行自得蹊路如見所夢爾、

讀み下し文

笠置の山は畿内の東偏に在りて我藩の封域（領域）に属す。上野城より半日程を距てて近し。その神秀（こうこうしくすぐれている様）の靈境（靈地と同じ）と為すや和（大和）の大峰に亟ぐと云う。往昔、彼は金剛界と稱し、此れを胎藏界と稱す。

余初めて上野に來たりて、即ち之を履まんとの情切折たり。然れども好き伴なく、未だ興に乗ずる能はずして、此に十有三年なり。蓋（蓋に同じ）し勝地（景色の良い土地）に遊ぶは雅侶（趣味の高尚な友）を必須（必要）とし、苟も俗物（つまらない人）を伴とするは無遊にしかず。

今茲に享和辛酉（一八〇一年）の歳、方外（心からの）の良友たる機宗禪師、余の為に遊を謀る。余搏髀雀躍（ももをうち、小躍りして喜ぶさま）して遂に二三子（二、三人の）を拉（引っ張って）いくし、以て従う。時に夏五幾望（陰曆十四日）、小午に発足（出発）す。暮れるに迫（お）び笠置邑に抵りて、逆旅（旅館）の舍（やど）に歇（やす）む。水（木津川のこと）を隔てて山に對するに、是れ、その北面の巖、岫（岩穴のある山）、岨（山の高く峻しいこと）、嶮（峻しいこと）、宛然（良く似ているさま）たること漢画（中国の山水画をいうか）の形勢（様子）にて、上方よりの勝槩（勝れた景色）に思ひ半ばを過ぐ（内容の大半が理解できること）。

旦日（明朝）、夙（早朝）に起き、郷丁（さとびと）を雇いて導侯（案内人）となす。山霧方に晴れんとす。津を渡り市を過ぎ、山の西趾（ねもと）を繞りて行き、斜めに坤（南西）の隅より登る。樹竹蒙籠（おおいこめる）とし、眺覽（眺望のこと）する所無し。地勢陂陀（なな

めな土地)にして登るに易し。盖し(要するに)盤回(ぐるぐるまわる)して行く也。

双巖有りて対峙(向かい合つて聳える)し閑と為す。其の下に一団の飄(瓢の間違いか)を設け、以て登陟者(登山客)の労を休む。呼びて曰く楠廠(馬小屋とか店の意)と。何の謂われなるかを知らず。

是れより漸く転じて北す。約行くこと六百歩にして福寿院に詣ず。首め、古鐘を觀る。制頗(すこ)ぶる奇雅(珍しくかつ雅やか)にして、所謂瓜形なるは、相伝に黄鐘調(邦楽六調子の一つ。従然草二百二十段で「凡そ鐘の聲は黄鐘調なるべし」といい、鐘の音は古くから黄鐘調が理想とされている)と称す。

余請いて之を鳴らす。悠揚(遠く遙かに届くこと)清婉(きよらかであやか)にして聴くべし。誠に尋常に非ざる音なり。甃(こしかけ)を躡(ふみ)て銘を閲す。建久の年の製なり。今を去る僅か六百余年なるも、当時の古律(音階)久しく亡く、無能にして黄鐘(の調べ)を制する(あやつること)を恐る。余、鐘の律(音階)を曉(さと)る(理解すること)こと能わざるがためなり。若し、或いは偶中(まぐれ当たり)せば、抑も亦奇(めずらしいこと)とするなり。書は誰の手なるかを知らずも、古韻(昔の風格があること)玩(めずらしい)とすべし。摹(模写すること)を主僧に託して去る。

護法祠(椿本神社)を過ぎ、西折して行く。路の右に一奇樹あり。大きき合抱(両手で抱える程の太木)を逾(こ)ゆ。亦数百年の物にして皮理(皮のしわ、もよう)の皴皴(両字とも、しわ)浪紋のごとし。未だ何の木なるか審かならず。殊方(異なつた土地)にも不可知(知ることができない)にして、以て余、経る所、他処に未だ之を見ること有らずは、良く異(めずらしいもの)とすべき也。

左顧(左の方へ振り向くこと)すれば則ち鉅巖(巨巖に同じ)兀然(高く突き出ているさま)と横たわりて、絶崖(非常に険しい崖)の上に魁偉(いかつき)をもつて人を驚かす。状は隆厦(ひさし)の如くにして、長さ十丈、その三の一を崖の外に突出す。路は其下を経て、過ぐる者之を危とす。号して曰く薬師石と。其の義審かならず。旁に一巖、贅附(こぶ)く。曰く馬蹄石(今にいう、笠置石か)と。

郷導言上(目上の人に云うこと)するに、「蹄の跡有り。儼然(おごそかで重々しく近寄りがたいさま)として印のごとし」と。

相伝に、天武帝、皇子たりし時、嘗て此に獵す。馬蹶(たおれ)て幾ど殆(あやう)し。忽ち神人(神通力を得た人)有りて扶掖(たすけること)し、竟に顛墜(転落)を免る。

因つて笠を卸し、之を石上に置き、以て其の識(しるし)を記(とどめる)ことす。踐祚(天子の位につくこと)に及んで遂に伽藍を創る。是れ其の笠置と号する所以也。寺の創、白鳳壬午(これ
は天武十一年、六八二年
となる)に於いて、今、
を去ること千百二十年

相い去ること数十弓(一弓は六尺)にして蒼巖(緑がかつた青い岩)山を負う。北向きに(正しくは東向き)壁立(壁のように切り立って聳えるさま)し高さ八丈ばかり、広さ五丈余、弥勒石

と称す。陷中（窪みの中）に像を鑄り、是れを当山の本尊と為す。災に罹りて石焦げ、状明らかならず。但し頭上の燄光（両宇ともひかり）の円相（像を囲む円輪）、僅かに存するのみ。荒庭は曠澗（開けているさま）なるも更に一物も無し。庭を隔てて別に崖に架して堂を構う。猶神祠（神を祀った建物）の拜亭、古の什一（十分の一）に足らずと云う。

文殊石は弥勒の右（正しくは向かって左）に在り、高さその半ばに及び、濶さ之に倍す。此れ亦旧鑄る所あるも、回禄（火災）の為、漫に剥るるところ也。余偶ま唐詩を記して曰く、「真相有無因色界、化城興滅在蓮基」と（唐の詩人李紳（七百八十年から八百四十六年）の新樓詩二十首にあり）。之をその旁らの石に題す（書きしるすこと）。

右に還りて磴（石段）を降り、堂の下を過ぎて北す。又三つの大石、山を負いて並立す。高さ四丈ばかり、広さ之に半ばす。

其の一つ北に向うは（正しくは南）胎藏巖と号し、次に東に向かうは金剛巖と号す。両巖連接（つらなりつづく）して曲り、屏風を立てたるが如し。下方分かれて開き、嵌然（洞くつのようなさま）として洞と成る。・黒くして測りえず。俗に龍窟（千手窟のこと）と呼ぶ。其の説、河漢（黄河と漢水）にて、殊に傳会（こじつけ）に属す。

次に亦東に面し（正しくは南）虚空蔵を雕鏤（彫り刻むこと）す。形勢（おもむき）爛漫（光り輝くさま）として、巖面、都にして遍（広く及ぼす）し。未だ俗（平凡）なるを免れずと雖も、亦奇観なり。殊に怪巖絶崖に倚り、前は劣じて径を通す。架棚を設くるに由（手だて）無く、其の何所に足を置くか知らず。豈、実に神人有りて虚を履て之を作れるや。天の仙靈（神仙）が作るを為すかと詫るも、其の説詰する（問いつめる）能わず。既にして之を思うに、此れ山頂より縋りて下り、命を捐てて施工（工事）せるもの也。奇を好みて怪しきを行うの尤も甚だしからずや。

巖の額に窓あり。星の墜ちし痕と称す。郷導喋々（口やかましげに）として怪しきを語り、人をして耳を拵わしむ（縁起に記載せるところの、空海の求聞持法による奇瑞を説明したのである）。

更に北へ数十歩、洞門（洞穴の入口）に抵る。古歌に咏ずる所の笠置の石屋なり（夫木和歌集に好忠の「河上やかさぎの岩屋けおぬるみこけをむしるとならずうばそく」とある）。崇巖（高い岩）層累（いくえにも積み重なること）し、崖に枕（臨んで）して峙つ。高さ三丈ばかり、頂ぎに一全石（一枚岩）横に亘る（安政の大地震で谷に転げ落ちていた）。厚さ二丈ばかり、径五六丈、方に平らに削り成すがごとし。内濶くして、これを称するに巍然（高く聳えている様子）たること城闕（城門）のごとしと。数人を容るるも並行す。余、石門を観ること多しも、未だ嘗て是のごとき宏壯（広く大きく立派なさま）なるものを見ず。俗に千手岩屋（これは千手窟ではなく、胎内くぐりである）と称す。下は観音谷と曰う。天平年間、僧良弁なる者、詔を承り、雨を祈りて。千手観音を此に奉じ、以て法を修すと云う。

洞口は北に向き、前は大なる壑（谷）に臨む。林巖峽流の景、天然一幅の画図なり。窈窕（深く遠くかすかなるさま）深邃（奥深いこと）として、極めて幽趣（奥ゆかしく静かなおもむき）あり。殆苦、目周さずして玩で、情給らずして玩ず。衆の皆、胸を盪し、称観（ほめるとみ

る)して止むのみ。

洞中、左の傍に一小竇(あな)あり。裁に人を容る。詰曲(曲がりくねる)窈黝(深く黒いこと)とし、動くこと或いは進退維れ谷まる。称して胚腫鑽入と為す。若し能く行きて出ずれば、冥間に亡母と相見ゆを得と云う。浮屠(仏徒)の人を愚にすること亦甚しからずや。

洞の下、右崕(右の崖)の巖顔に大書篆文(篆書体の文字)の刻あり。楠公の花押と称す。相伝に、元弘の乱に公、徵(招き)を蒙りて来たるは此なり。自ら名を題して以て志を見すと。好事者(変わったことに興味をもつ者)鐫(彫りつける)を為すか。字の径は尺余、頗る公の諱(死後につけられた称号)の字に似たり。余摹榻(碑銘などの文字をすり写すこと)を欲するも、崖峭(がけが険しいこと)にして足を措く縁なきを恨むべき也(昭和三十年代迄は胎内くぐりの下に辛うじて踏み跡があつて谷の中程に是を見ることができたが、今は路も消えこれをみつづけることが出来ない)。

洞を出て西し、観音谷の上に従いき、崖に縁りて以て去る。蹊(細道)頗る峻隘(高く迫つて険しいさま)、僂僕(か)みて進む。汗津津(たえずわきでるさま)として下る。傍らに太鼓石あり、杖を以て之を撃つに、馮馮(土をつき固める音の形容)として声あり。蓋し内は虚なり。

行くこと数百歩にして、不動巖(今は平等石という)に抵る。山岬(山腹)突出し、人の肩を竦すが如し。鉅石(巨石に同じ)疊起(重なりあつて立つ)し、頂きに魁巖聳つ。他より之を望むに屹(そばだつさま)として巨仏の立つに似たり。故に号くか。是れ山の極北(北のはて)となす。世俗に所謂奥の院なるもの也。

東峰に懸泉(滝)あり。千手瀧と号く。観音谷を隔てて之を望めば、匹練飄飄(ひるがえりゆらぐ)の光(景色)、松翠(松の緑)の間に隠見す。亦絶妙の画景也。

脚下を俯瞰(見下ろす)せば絶壑(切り立った谷)千尋(測りがたいほど谷が非常に深いこと)、逡巡し身を側(そばだて)て過ぐ。俗に東の。一三子直ちに稜頂を欲す。余戒めて之を止む。

左にその背を旋り繞りて、平等巖(前述の不動巖はこの平等巖を方角を変えて低所より見たるもの。そのため不動巖は相当大きく感じられる)に赴く。戰兢(戦々恐々に同じ)として匍匐(はらばう)す。醜態笑うべし。余趨超(行き悩む)して敢えて前まず。然れども独り止むべからず。勉み彊て相従い、岬の肩尖に即く。三面壁立、峻絶(非常に険しいこと)にして上頭(うえのほう)、坦夷(平坦にして)なること砥の如し(砥石の表面のように平らなこと)。広表(ひろさ)数丈、百許りの人を坐せしむべし。中央に一円石あり。大きき約十圍、宛ら台盤(食器類をのせる脚付きの台)の托物の如し。見る者その滾転(ころがること)するを恐る。号して盪石と曰う。

余嘆じて曰く、「岌岌(危ないさま)、傾斜が急で危ないさま)として危き哉。善きなり、其れ勢いを取りて命名せるなり」と。

郷導曰く、「否。此の石たるや、人、之を撼せば輒ち動き、宛転(ゆるやかに動くさま)として已まず。若し血気の者有りても、地震暴風にても未だ嘗て顛隊(ころがりおちる)せず。

是に於いて隻手にて之を試して信ぜよ」と。

余之を聞くに、西土(西の方の国)の繹山(中国山東省にあり)の絶頂に一丸石あり。高さ數十丈、敬だちて(かたむくこと)平石を置き、下を臨むも測りえず。之、転ずべくして転ぜざるの勢い有り。泉州の靈山の大磐石上に一卷石(握り拳ほどの石)有り。其の形、毬に類し(似ていること)下に属さず(接点がないこと)。勢(有様)重さ万鈞なり。然れば一夫を以て之を撼せば、則ち兀兀然として動揺す。紹興(中国浙江省にあり)の大亀塚の上に直豎(直豎に同じ)直立して堅い)の一石、槌を挿るが如く、一人にて之を撼せば則ち動き、其の下以て線(わずかにの意)過するを可とし、数十人之を昇ぐも則ち起こす能はず。莆田九鯉湖(中国福建省にあり、九鯉湖風景区には湖・洞・滝・石の四奇がある)雷轟の際(みぎわ)に石人(石を刻んで作った人形)有り。手指を以て之を戳(つくこと)するに則ち動き、而して力を極めて之を挨(押し)することするに則ち屹然として動かず。雁蕩(浙江省の南部、温州市にあり、奇峰怪石、滝、洞窟などが絶景を作り出している)の南峰に両の石有りて相い圧す。大きさは屋二間ばかり、下なるは静石と為し、上なるを動石と為す。之を推し動かさんと欲し、須べからず一人静かに石上に臥し、双脚を以て撐(突っ張ること)すれば、石、轟然(大きな音が轟き響くさま)として声を作り、尺ばかり移り開きて立つが如し。而して手にて之を推すも、千百人と雖も動かすこと能わず。人咸以て理を不可解と為す。或いは謂う、神、戯らに之を為すと。余嘗て之を思うに、此れ蓋し、石底に筍有り。相接して深く入りて漸く大となり、故に動きて転ぜずと。是の石亦然るのみ。怪むに足らず也。

進みて岬(がけ)の端に臨み、巖壑(山中のくぼんだところ)を俯瞰(見下ろす)す。危きこと尤も甚し。目眩(くら)み股に粟するを禁ぜず。君子の宜しく近づくべき所に非ず。俗に西の覗きと称す。是の処、眼界豁如(視界が開ける)として、流(木津川)と峙(山が高く聳えたつ)の趣の奇絶(普通と違って素晴らしいこと)殊に勝る。然れども人その険なるを憚り、或いは到ること能わず。同遊僉曰く、「苟も此の山に至りて此の境に詣でずば、則ち未だ遊びを始めざるが如し」と。

余曰く、「然るや。抑も肉を食し馬肝を食さずも、味を知らんが為には害げず(険しい場所に行かない者をもって笠置山を理解しない者であるとはいえない。馬の肝は毒があると言われていた。史記列伝の儒林列伝第六十一にこの言葉あり)。何ぞ必ず人に冒険を勧めん、矧や、親の遺体(父母が残した身体、即ちその子供)を以て、徒らに遊観(歩き回って見物すること)を為して、此を履うは不測(思いがけないこと)なり。其れ戒めざるべきか」。既にして笑つて曰く、「山水の中に学究の身(ひたすら学問などに没頭する人)を見、説法するは頗る亦殺風景(興趣をそぐこと)なり。恐れるは山靈の冷笑のみ」と。即ち衣を払い起つ。

郷導援けて之を止め、指点(指さし示し)して曰く、良(北東)の方、傍らの麓に一弧村あり、曰く飛鳥路と。元弘に天子蒙塵(天子が難を避けて都から離れること)するは此れ也。彼の民、賊を導きて、夜観音谷由り登り、襲いて行宮を陥しいる。何ぞ其れ刁狡(両字とも悪

賢い、狡い)たる也、是に於て、我が邑は隣交(近所づきあい)を絶つ。今に至りても肯て婚を與にすること無し。奴婢(罪人で奴隸として使役される男女)を買うが如きも亦た容れざるなり。彼の輩の子孫は世に癩風(らいびょう)を患う。因つて之を癩の郷鄙(むらざと)と号す。孽(罪惡)の報に非ずして何ぞや。睥、其の地を睥みて、扼腕(残念がつて手で腕を強く握りしめる)し以つて語りて、人をして慨かしく、激昂せしむ。嗟呼人心の尚義たるや、今五百歳(年)を下るに逮び、尚猶遺臭(後世に残された悪い評判)を悪む、邑俗の厚きこと、殊に嘉称(褒め称える)すべし。往歳(先年)我公巡封の日、稱して義邑と為す。事見公覽古詩序、蓋做楚人称武陵 為義。華褒(非常に尊い贈り物)の褒(ほめたたえ)と謂うべき哉、彼兇民の家、眞に所謂天刑(天罰)の病、亦畏る可し也耶。風に臨みて感歎するは之に久し。

復路をとり還る。往きに比し頗る易し。迤邐(ななめ)に南し、行在の故趾を登覽(高い所に登つて眺めること)す。中峰の最高頂に在り、古木蕭森(物寂しい森)、莽叢荒穢(くさむららが倒れ、あははてる)し、懐古の感に不勝ず。盤桓(うろうろとして徘徊すること)して詩を詠ずるも、章(一編の詩歌)を成すこと能はず。

林を穿ちて(貫くように進むこと)徑を繞り、西に往いて山觜(山のはし)を極む。道是れ楠公の館舎(やかた)の所。史を按ずる(調べる)に、公、命を拜し策を獻じ、即ち辞して河内に還り修城を急ぐなり。豈其の所に一宿し、遂に欽慕(敬いしたう)して云う、「然るや、亦盛徳(天子の徳)、遺愛(故人がこの世にのこした功績)の至り也」と。

一磐石(大きな岩)あり。方四丈許、高さ之に半ばす。一方に斜めに下る。以て攀躋(よじのぼる)するを可とす。往昔官軍海螺を鳴らせし所、亦錯(誤りに同じ)して楠公吹螺巖と稱す。二三子走りて之に上る。勢いに乗じて直(真っ直ぐ)に趨(走ること)り、殊に意をなさず。既にして幾ど下る能はず。面に人色無し。教導之に基えて、趾(あし)を狭めて疾く歩かば乃ち顛(たおれる)せざるを得る。若し足を駐む(留める)こと少なくせば、便ち滾がると云う。此れ亦、游者に当る所の戒め也。其の地、白砂清麗にして、席(むしろ、ござなどの敷物)なくして坐るを可とす。蓋し、霸府(幕府)の相君(大臣)、近朝、京師(京都)を過ぎるに修憩所として例所(しきたりとする場所)と為すと云う(江戸時代の資料によれば、幕府の要人や藩主が来山した際は、ここに幕などをはり、トイレや茶果の用意をして接待するのが通例であった)。

山下の閭廛(村里の家)、直履の底に在り、滄流(深くて青々とした流れ)その間を貫く。舟舩泛泛(浮かび漂うさま)として殆ど喚ぶべき也。正に南四里に南都の春日山、群山の表に鬱秀し、蒼翠(樹木が青々と茂っているさま)掬うべし。迤西(ななめにし)に河内の生駒山、亦諸掌指す。是の日蒙雲(雲が覆い尽くすこと)にして見えずも、浪華即ちその西に在り、平安(京都)都)当に直北にして、竝に此を距ること十二里、皆一日にして至る也。

転じて東行すること百歩ばかり、遶りて弥勒石の頂きに出づ。是の処亦善く響き、足にて之を頓(地面に打ち付ける)すれば羃々と鳴る。

余笑つて曰く、「弥勒、何ぞ罪乃ち止まざるか」。頰(みおろし)て之を窺うに杳(奥深く暗いさま)と

して堂の背を見る。凜たり。胆寒く足心(足の裏の中心)酸洪す。惴惴(おそろしい)たるかな。相引きて以て去る。

是に於いて山中の諸の勝(地勢、景色の勝れていること)、略遍く搜覧す。遂に南し、正月堂遺趾(現在の大師堂の場所)を過ぐ。磴徑(石段のみち)迤・、(ななめに連なる)に降り、薬師巖の下に至る。洞門の勝(勝れた景色)を顧念(おもん)するも、猶未だ慊(満足すること)せず。再び往きて之を觀る。愈(いよいよよつかしみ)懐(懐)為し難しく、徒久しく之に倚り、然る後始めて去る。

護法祠の左方に東峰への路有り。之を詢(相談する)に郷導、「奇觀有ることなき故に往かず」と(こには現在稻荷神社がある。ここから見下ろす秋の紅葉がすばらしい)。

福寿院の前由り南行し、般若台の古基を覽る。灌木猥くして奥に入るを得ず。昔、茲の山の盛りに、台殿(高台と宮殿)相い望まば、莊嚴(美しく飾り付けた仏堂)輪奐(建物の広大で壮麗な美しさ)たるも、元弘の兵燹(兵火)は灰燼となし尽くし、壊磴(壊れた石段)、礎、随処に跡の存するのみ

正月堂は南都二月堂に先だち創り並びに建する所。天平勝宝四年、彼の今迄き存し遺法永く行はる。此れ則ち、荒廢すること數百年、図を按ずるに其の故址を認めることを得。般若台は建久中、本山中興の祖、解脱上人の築く所。台上に六角堂を設くと云う。余は皆併せて其の名、之を失す

衆(多くの人々)頗る惆悵(恨み悲しむこと)す。余之が為、唐句を誦して曰く、「仙境是誰知処所、人間空自造楼台、只道鬼神能護物、不知龍象自成灰」と(唐の詩人羅隱(八三三年から九〇九年)の作)。

機宗(あぜん)啞然として曰く、「亦道学(仏教の道理に関する学問)を講じ来り」と。遂に多聞院を過ぐ。龕(厨子)を啓き毘沙門像に謁す。相い伝うるに楠公の奉持する所と為すも、全く馮抛なし。疑い亦誣るのみ。

主僧の齡、古希を過ぎ、龐眉(ふとい眉)古貌(氣持ち、外見とも古人のように、真つ直ぐで純朴なこと)にして道骨(仙人のような風采)ある者に似たり。因つて山中の故実(昔あった事柄)を質問するに、旧記を出して見跡(見ること)す。京僧月潭録する所(別資料、笠置山記、元禄二年)甚だ詳し。但し勝れずして性誕(怪しくでたらめ)なるは亦浮屠(仏教徒)の常態のみ。文殊、不動、知足の三院、盖(蓋に同じ)し往きて觀るに足らずと云う。

是に於いて始めて山を辞して下り、還りて双巖の下に抵る。郷導謂いて曰く、「来る時報せるを失せり。元弘の役に參人(三河国住人)足助次郎重範、阪の門を守り、先登の二騎を射殪す。賊、馬を躍らせて埤(低いかきね)に逼るを又之れ射却す。南都の僧兵累に巨石を以て下に滾がし、人馬を粉碎す。賊軍敗走、自ら相い蹂踐(ふみにじる)し、積れる屍、満山の谷を填む。この間を地獄壑(谷)と号ぶ」と。応に是れ當時の綽名(あだな)にして、然れば則ち史に血漲川と称するは味(おろかなこと)たるかな。地理の過ちなり。

亭午(正午)津の頭(先端)に到る。早くに舟艤(出舟の用意をする)を命じ埃つ所、逆旅(旅館)の主人廚帳を具して以て従う。溯洄(いづれも、さかのぼること)して峡中に入る。即ち洞門の在る所に向かいて下に瞰たる者也(源を出で、伊賀より西、木津を経。淀河に入る。古に泉河と称す)

獅子潭を過ぐるに、北崖の積石(積み重なった石)、峯を成す。高さ百仞ばかり、峻嶒(山

の嶮しいさま)は、疎勢(そばたつ勢い)にして影を潭底に涵し、石罅(細かい割れ目)に疎松、参差(互いに交錯しているさま)して挿すが如く、尤も逸趣(ぬきんでた趣)有り。

舟子(船頭)指し示して曰く、「巖尖の突起の水に臨める形勢(おもむき)、獅頭の若し。以て名となす所也」と。

南顧(南を顧みる)して鯨巖(昭和三十年頃までは平等石の下から細い路があったが今はなく、この巨石には至れない)を見れば、頽然(倒れ崩れるさま)として山の半腹(中腹)にあり。又水の滸に蟹岩有るは、亦皆形の似るを以て名を得る。徒足(むだあし)にて俗の眼耳を悦ばすのみ。此れより以往(これよりさき)兩岸の林巖、愈奇(ぬきんでる)、杜鵑花(ツツジ)巖際を点綴(飾りをちよつとつける)し、紅紫、繡(刺繡)の如し。舟中に杯を伝へ(移すこと)引満(満引、杯に酒を満たし、一息に飲むこと)し、殺菘(肴と野菜)を具(うつわ)に略(おさめること)す。詠声の驩(よろこぶ)を賞するは興(たのしみ)と言ふべきや。

沂(さかのほ)ること十町ばかりにて、旄頭の湍(原本のフリガナではシャグマイハノセのように読める)に至る。水心(水面の中心)に両つの巨石有り。突兀(おどろき)とい出、駭水(おどろきはねあがる水)衝激して石頂を跳過し、其の迸り散じて下ること、・鬆(馬の垂れたたてがみが乱れるさま)紛乱(入り乱れる)として兜鍪(かぶと)に着せる所に比す。白髭(垂れ下がっている毛飾り、ここでは河水)の甦然(草木の実などの垂れ下がるさま)として下に垂れるは奇観にして、名に称(な)うものなり。鼓掌(手をたたく)し、嘆賞(感心してほめる)す。岸頭(岸の上)層巖の競い峙ち、杜鵑花(ツツジ)最盛にして、爛漫(花が咲き乱れるさま)として波に照るは殊に壯觀と為す。夫れ笠置に遊ぶは斯かる境(場所)に至らずば可とせす。又斯かる時を以てせざるば可とせす。是に於いて洗杯し更に酌し、興に乗じて反るを忘る。日已(ひくれ)に晡(申の刻、午後四時頃)に向かう。乃ち廻舟を命じて下る。時に軽陰(あやみ)曖曖(両者共、暗い意)、微雨(れんせん)廉纖(小雨のそば降るさま)し、烟嶂(煙った嶮しい峰)、雲巒(丸い山)の幻出するは一段の奇観なり。余、舷を扣ち、詠じて曰く、「山色空濛(うすぐらい)、雨も亦奇なり」と。機宗撃節(激賞すること)して曰く。「維れ天の賜、亦厚からずや」

既にして逆旅(旅館)に反る。雲陰俄に加はり、《霏(大雨)として暴至す。余首を搔き、嘆じて曰く、「天の賜厚きに過ぐ。何以(何物をもつて)之に堪うるや」と。

機宗色を正して曰く、「於山暨峡免於妨遊。詎(なん)ぞ幸いに非ずや。天何をか負う」と。衆皆、輜(やまかご)を命じ、油噓(ほろ)を以て之を冒ぐ。余、其の孱(せん)狭(狭いこと)なるを笑い、独り傘を撐して歩く。其の実、性は油氣に勝らず。隴(おか)阪を升降(上り下りする)ことし、泥を衝いて潦(路上の流水)を渉る。殆ど將に顛踣(両字共たおれること)すること、数(はしばし)なり。

薄暮(ゆうぐれ)、島原(三重県伊賀市、伊賀上野の手前)の駅に届く。峡流、驟溢(俄にあふれる)し、渡舟頗る危うきも、僅かにして獲済す。因つて前程(行く手)に水の阻(はば)めるを恐れ、努力して疾走し、敢えて少愒(憩うこと)もせず。雨益甚だしく、路益艱む。夜に速んで長

田川（伊賀上野西郊外）に臨む。猶（それでもなお）渡りを喚ぶ声を聞き、我が心則ちやわらぐ。城門に入る比、正に初更（午後七から九時頃）の頭（はじめ）なり。同行の内二人及び余の僕しもべは稍後れて渡りが絶へ民家に宿す。翌、午（十二時頃）始めて帰するも渡りは猶危うしと云う。嗚呼、癡雨（おろかな雨）は人を悩ます。良きにして亦苦なり。然れば勝地（景色のすぐれた土地）賞会の樂、良朋雅詠の歡、孰ぞ得る所、失する所を償わずと謂うべけんや。矧や夫れ十数年の素願、今に乃んで獲遂（成し遂げること）す。以て記さざるべからず也。

或いは曰く、「笠置の勝槩しょうがい（すぐれた景色）奇とせば則ち奇、然れども大峰を視れば、直に児孫（子や孫）たるのみ」と。

余謂う、「大峰は窮僻きゆうへき（片いなか）の境にして雲巒千里、鳥道（険しい山道）僅かに通じ、極めて健脚に非ずば到るに易からず。即ち奇偉（優れて立派なこと）瑰怪（珍しくて不思議であること）、固より絶妙なりしが為、然して荒涼杳絶（はるかに絶す）し、人をして慥慥（するどく、すぎましい）寂寥（さみしく、ものしずか）にせしむ。凡そ名山としては異境なり。率ね皆然り。

今夫れ是の山、里巷（むらざと）の間に根盤し、登ること僅か幾許にして、乃即ち絶勝（景色の優れたところ）目を奪う。佗山（他の山）安んぞ之れ有るを得んか。豈あた信ぜずんば奇妙と為すや。是れ乃ち尤も名山となす所以なり」と。

爰に此の記を撰し、後に来る探勝の客の為とす。辞の絮煩（くどいこと）を厭わず、委曲（詳しく）を具に録し、織悉（隅々まで）罔遺（網をかけたこと）し、山の勝槩（すぐれた景色）を茲こゝに尽くすなり。庶わくは来遊者をして信ずるに足らしめ、行きて自ら夢に見し所の如く蹊路を得せしめんことを。